

湯浅吉郎の

「告別之歌」に寄せて



河野 仁 昭

去る一月、茅ヶ崎市の小崎静という方

ら、上野直蔵総長宛に、吉郎と署名のある一篇の詩の原稿が寄贈された。詩は一枚の原稿用紙に毛筆で書かれ、漢字にはルビをふった完成稿である。(本誌扉の写真参照)

念のため、詞書もふくめて、全文を左に掲げておきたい。

明治二十八年六月二十八日

同志社卒業生にかはり

て作れる告別之歌(学校歌の譜)

吉郎

一
松杉の緑の門。赤旗。白旗。
ふく風になびくもあはれ。われらを送

りて。

いざさらば。さらばといへど 教の師

らよ。

世の中の別れのごと。袖にハ露なし。

二

夏菊の黄金の瓶。琴の音。笛の音。

さし水にひびくもうれし。われらを送りて。

いざさらば。さらばといへど 学の友

らよ。

世の常の別れのごと。袖には露なし。

三

身ひとつをいまやさざげん ミ神に。
ミ国に。

父母の家路とほくとくかへりゆきて。
いざさらば。さらばといへどをしへの園生よ。
なほざりの別れのごと。袖には露なし。

作者は断わるまでもなく湯浅吉郎(半月)である。彼が考案して同志社の徽章が制定されたのは、周知のように明治二十六年だが、社旗はまだ制定されていなかった。卒業式などには紅白の旗を門に立て、式場か謝恩会場には夏菊などを飾り、琴や笛の演奏がおこなわれたのだろうか。そういう光景が目につく。この作品のモチーフは、「身ひとつをいまやさざげん ミ神に。ミ国に」の句にうかがえる。「袖にハ露なし」というリフレンは、おそらくそのモチーフと関連する措辞だろう。卒業生たちは晴れやかな表情で巣立つて行ったかも知れない。多分そうだったであろうが、そういう卒業生への吉郎の祈りと期待がこれを書かせたのではないか。

同志社神学科卒業の年(明治十八年)に、旧約聖書から題材を得て書いた彼の長篇叙事詩『十二の石塚』は、日本近代詩最初の個



小崎弘道自筆集

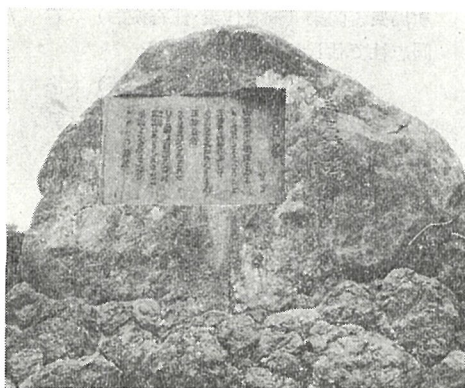
人詩集としても著名だが、同じ年に渡米してエール大学に学んだ吉郎は、明治二十四年に帰国し、母校の神学校で旧約を教授していた。かたわら、同志社の後輩である雲峯磯貝由太郎（明治二十二年英学校普通科卒業などとともに、『同志社文学』『国民之友』『女学雑誌』などに、新体詩を相ついで発表している。右の「告別の歌」はその頃のものだが、『十二の石塚』に題材手法ともに類似した「天地初発」や、短篇「みえざる御手」によらずして／ふく嵐こそなかりけ

れ」（天然）といった詩句などからも察せられるように、彼は神学者であると同時に信仰の念篤い詩人であった。

校友会編『新島先生記念集』（昭和15・1）に、吉郎は新島の生涯を描いた四行一節、全七十節の長篇詩を寄せ、その第一行目を「あ見えざる神の御手は」と書き起している。昭和十八年二月に永眠した彼の、最晩年の作品であらう。

ところで、吉郎の「告別の歌」をご寄贈くださった小崎氏は、総長宛にお手紙を添えられて（無断引用をご容赦下さいますように）、「今朝ふと昔の物より同封の古き時代の卒業生が父（弘道）におくりました物の如」き詩が出てきたので、ちょうど卒業式の時期でもあり、「私一人でなつかしむより、先生に差し上げ」たいと書いておられる。

小崎静（静子）氏は、同志社第二代社長兼校長（明治二十五年就任）小崎弘道の令息道雄氏（故人）の夫人である。先年『小崎弘道自筆集』（カットの写真参照）が道雄氏から寄贈され、又、その後弘道・道雄関係の貴重な記録・資料類が多数同志社に寄贈され、関係者が深く感謝していることもここに記し



群馬県安中市にある半月詩碑「十二の石塚」

ておきたい。この度はまた、吉郎の詩の原稿をご恵送たまわったわけだが、古い時代の物なので、どういいうきさつで弘道の遺品の中にこれがあったかは定かでないようである。無理からぬことであらう。

いらざる推測かも知れないが、卒業式の感懷を校長に気軽に告げる程度の気持ちで作者自身が進呈したのではないかと私は思う。でなければ、「卒業生にかはりて作れる」と、詞書で断る必要はあるまい。また推稿した部分をそのままどめた原稿を、

儀式張った進呈の仕方をしたとは考えがたい。いずれにしろ、吉郎は、この詩を書いたとき、校長とともに同志社を去る日（明治三十二年）がやってくることは、もちろん予想もしていなかったろう。

吉郎には「同志社学校の歌」（同志社文学 55号 明治25・6）や「同志社校歌」（創立六十周年の作、校友大中寅二作曲）のほか、同志社関係に題材を得た詩が幾篇あるが、右の「告別之歌」は、かつて一度も活字にはしていないようである。少なくとも私が調べた限りでは見当たらない。その場かぎりの即興詩と考えてのことかも知れないが、公表した作品より質的に劣るものとは言いがたい。校長に進呈してしまったので、多忙な校長に頼みづらくて公表の機会を失したのかも知れない。複写機などない時代である。全くありえぬこととは思えないが、確証はない。

いずれにしろ、これは写真でも明らかにように、湯浅吉郎の自筆原稿であり、吉郎詩の特徴的な性格もよくうかがえる。読まれる詩ではなく歌われる詩として書いたものであろう。小崎静子氏のご厚志がなかつ

たなら、永久に埋もれていたかも知れない。明治期の同志社人の文学活動に関心を抱いている者の一人として、同氏に対して

深甚^{タカシ}の謝意を表したいと思う。

（社史史料編集所事務主任・大学文学部講師）

同志社関係出版物

新島 襄（岡本清一著）	同志社大学出版部	¥ 500
新島 襄（魚木忠一著）	〃	¥ 300
髪 ^{カミ} の掠奪（岩崎泰男訳）	〃	¥1,000
同志社歳時記（生島吉造・松井全編）	〃	¥ 600
続・同志社歳時記（生島吉造・松井全編）	〃	¥ 700
同志社設立の始末（新島 襄）	学校法人同志社	¥ 100
同志社大学設立の旨意	〃	¥3,000
同志社90年小史（社史史料編集所編）	〃	¥ 500
同志社歌集	〃	¥ 210
新島襄書簡集（編者代表・住谷悦治）	岩波書店	¥ 750
同志社で話したこと書いたこと	〃	¥ 350
（久永省一著）	洛北書房	¥ 350
イエスの生涯と思想（高橋 虔）	教文館	¥ 350
憲法と平和（田畑 忍）	〃	¥ 350
人生、友情、学問（上野直藏）	〃	¥ 350
日本経済の源流（住谷悦治）	〃	¥ 350
近代日本文化とキリスト教	〃	¥ 350
（高道基・社橋三郎）	〃	¥ 350

取扱・同志社収益事業課

淡江中学と同志社

——ラグビーを通じて——

岡 仁 詩



陳 清忠先生の墓前にて

淡江中学は、創立一〇五年を迎えた台湾有数のキリスト教主義学校です。去る三月十三日が創立記念日で、同時に台湾ラグビーの創始者陳清忠先生（故人）を記念して毎年行われているラグビー大会の第十回大会開幕日にあたり、同志社ラグビーOBチームが招かれました。

陳清忠先生は淡江中学（旧淡水中学）から同志社大学英文学科に進まれ、在学中、ラグビーの名スリクォーターとしても活躍されました。

卒業と同時に母校淡江中学の英語教師として教鞭をとるかたわら、校庭に自らグラウンドを設計・造成され、生徒たちにラグビーを教えました。

大会の開会式で、淡江中学OB会長楊延謙氏が、「五十年を越えた台湾のラグビーは淡江中学で芽生えました。そしてその芽は同志

社から陳先生が持ち帰られたものです。台湾のラグビーは、同志社により始められ、淡江中学に育ったといえます。その同志社チームをこの記念すべき十周年大会にお迎えできたことは……」と声を震わせながら、流暢な日本語で挨拶されたときは、今さらながら、同志社の国際主義の歴史の一頁に触れた感じがしました。

陳清忠先生の墓標は、ラグビーボールのデザインで飾られ、恐らく世界でもただ一つのものだと思います。その墓前に花を捧げ、先生のご遺族および淡江中学OBの方たちと讃美歌を合唱したのも感慨深いものでした。

同志社予科卒業、台北帝大一期生で、三文文士と自称しておられる柯設楷先輩、同志社中学出身、早稲田ラグビーの中期黄金時代の名スリクォーター柯子彰先輩、懐かしい同志社の校友も淡江中学のOBとして私たちを大歓迎してくださいました。そしてその三週間後、淡江中学のラグビーチームが来日し、特に京都で同志社高校との対戦を希望し、一日、同志社の学内を見学しました。栄光館、チャペルの前での記念撮影は、台湾の同窓、校友への何よりものお土産になったのではないかと思います。古い歴史を持つ淡江中学と同志社の交流が、ますます意義あるものになることを祈ります。（大学文学部教授・体育）